



# 日本植物病理学会ニュース 第104号

(2023年11月)

## 【学会活動状況】

### 1. 部会開催報告

#### (1) 東北部会開催報告

令和5年度(第59回)日本植物病理学会東北部会は、9月14日、15日に、弘前大学農学生命科学部(青森県弘前市)にて開催され、一般34名、学生29名(合計63名)の参加があった。講演発表は、糸状菌病7題、ウイルス・ウィロイド病6題、細菌病2題、植物保護3題の合計18題であり、活発な議論と意見交換がなされた。幹事会・総会では次年度部会長に岩手大学農学部の磯貝雅道氏が選出された。また、本年度の日本植物病理学会東北部会地域貢献賞は、秋田県仙北地域振興局農林部の佐藤裕氏「寒冷地果樹の病害診断と防除に関する研究」に授与された。初日の一般講演後には、弘前大学構内のレストランスコラムにて久しぶりの情報交換会が開催された。磯貝雅道部会長のご挨拶のあと、弘前大学名誉教授の佐野輝男氏から乾杯のご発声をいただき、42名の参加者により活発な情報交換がなされ親睦が深められた。令和6年度は山形県での開催が予定されている。(田中和明)

#### (2) 関東部会開催報告

令和5年度日本植物病理学会関東部会は、2023年9月15日、16日に玉川大学コンサートホールにて4年ぶりの対面形式にて開催された。参加者は合計119名で、その内訳は正会員70名、学生会員45名、非会員4名(うち学生3名)であった。

特別講演では、理化学研究所環境資源科学研究センターの松井 南氏に「ゴムノキ葉枯れ病防除のための複合的技術開発」という演題で、インドネシアで発生するゴムの病害防除に関する国際共同研究をご講演いただいた。また、一般講演では合計30題の発表があり、その内訳は菌類病関連14題、ウイルス・ウィロイド病関連10題、感染生理関連2題、植物保護関連4題であった。講演発表に対する質疑応答では、具体的な内容に関する質問だけでなく、疑

問点を尋ねるなど対面の良さが改めて示された。学生優秀発表賞には、今年度は14名のエントリーがあり、佐々木優さん(信州大学農学部微生物植物相互作用学研究室)、戸畑幸治さん(東京農工大学細胞分子生物学研究室)、Padilla, Celyneさん(玉川大学大学院農学研究科植物病理学分野)が受賞された。

初日夕方から開催した着席形式の情報交換会には70名が参加した。長らく直接会うことができずに停滞していた意見交換や新たな発想のきっかけの場となった。また、会の最後には、日比忠明名誉会員がご挨拶として昨今の研究を取り巻く雑感をお話しされ、若い世代だけでなく我々もまた刺激を受けたと思う。

2日目の午後からは、第18回若手の会が開催された。野澤 俊介氏(玉川大学 農学部)、佐藤 一輝氏(理化学研究所 環境資源科学研究センター)、舘田 知佳氏(岩手大学 農学部)から研究およびキャリアについてのご講演をいただき、参加者は70名であった。その後、町田にて若手の会も情報交換会が行われた。

部会を開催する際に当然のように対面であった以前とは違い、オンライン開催と対面開催を明記するようになった。昨年度、今年度と部会開催をお引き受けし、オンライン開催と対面開催の両方を経験した。なかなか対面開催の記憶が呼び戻せず、参加者の方々にご不便をおかけしたことについて、ここでお詫び申し上げるとともにご容赦願いたい。

来年は、東京農工大学が開催機関となって関東部会が開催されます。(渡辺京子)

#### (3) 関西部会開催報告

令和5年度日本植物病理学会関西部会は、9月23日(土)~9月24日(日)の日程で、近畿大学・農学部(奈良キャンパス)において対面形式で開催されました。参加者は、198名(一般会員102名、学生会員96名)で、発表数は89題でした。9月23日(土)午前11時から役員会を開催し、午後1時から総会が行われ、全ての議案が承認されま

した。次期部会長には京都大学の高野義孝氏が選出されました。また、次年度の部会は、愛媛大学の小林括平氏を開催地委員長として、愛媛大学で開催されることが決定されました。総会終了後には、鈴木信弘部会長により、「ネオウイルス学から植物病理学へ」と題した講演が行われました。一般講演は、3会場で行われ、いずれの会場においても活発な質疑応答が行われました。9月23日の一般講演終了後の午後6時半より、近畿大学農学部「つながる館」において、対面方式で情報交換会を行いました。情報交換会には110名の方が参加し、鈴木部会長のご挨拶と開催地委員長（川崎）からの挨拶の後、次期部会長の京都大学の高野氏より乾杯のご発声をいただきました。久しぶりの情報交換会であったこともあり、飲食をしながら、有意義に親睦を深めていただきました。また、情報交換会では、奈良県の支援による奈良の日本酒コーナーも用意され、多くの参加者が日本酒を堪能されていました。情報交換会の終了時には、次期開催地委員長である小林氏からご挨拶をいただき、その後、閉会のご挨拶として、神戸大学の土佐幸雄氏から「温暖化に伴う新たな病原菌の出現と植物病理学研究の更なる重要性」に関するお話をいただきました。2日目の一般公演は、9月24日の午前9時から開始され、ここでも活発な質疑応答が行われました。

また、9月22日（金）の午後1時半より、近畿大学農学部において、日本植物病理学会関西西部会・若手の会が対面で開催されました。参加者は、53名でした。午後2時より、京都大学の高田昌汰氏、石川県立大学の齊藤大幹氏、奈良先端科学技術大学院大学の大津美奈氏による講演と活発な質疑応答が行われました。研究内容だけでなく、研究



写真1 講演会場の様子



写真2 情報交換会の様子

への取り組み方など、参加した学生・若手会員は、今後の研究活動にとって有益な情報を得ることができたようです。その後、全参加者による自己紹介と交流タイム、それに引き続いて懇親会が行われ、学生・若手会員が親睦を深める絶好の機会になりました。

今回の部会では、講演会および情報交換会が久しぶりに全て対面方式であったこともあり、手探りで準備を行った部分も多々ありますが、開催地幹事としてご対応いただいた近畿大学の山口公志氏をはじめ、近畿大学、奈良先端科学技術大学院大学および奈良県農業試験場の関係各位のご尽力とご協力によって、非常に活気のある部会を開催できたことを、ここに記して感謝申し上げます。（川崎 努）

## 2. 第17回植物病害診断教育プログラム

令和5年9月4日から8日まで岐阜大学応用生物科学部において第17回植物病害診断教育プログラムを開講しました。本プログラムは毎回、受講希望者が多く、今回、プログラムの募集定員20名に対して、受付開始から4日間で申し込みが定員の2倍以上になりました。開催案内に申し込み終了日を予定より早めることがあるとお知らせはしていましたが、終了日まで待つとお断りする方が多数になってしまうと判断して、その時点で受付を終了しました。受入れを24名に増員のうえ、若手、社会人を優先して受講者を決定しました。その後にお申し込みを予定されていた方、また、お申込みされながら今回、受講がかなわなかった方々にお詫び申し上げます。なお、次年度本プログラムは関東地区での開催が予定されています。今回は北海道から熊本県まで全国各地の方々にお集まりいただきました。受講生のうち学会員は13名、非会員は11名で、国・県の研究機関等の方が12名、種苗・農薬・農業資材会社など民間会社の方が12名との構成でした。

初日のプログラム開始時に、実行委員を代表して岐阜大学の須賀晴久から挨拶の後、横浜国立大学の平塚和之学長からご挨拶をいただきました。さらに受講生及び、講師それぞれから自己紹介をしていただく機会を設けました。但し、本プログラムは5日間にわたっており、この時点で会場に講師全員は揃わなかったため、一部の講師についてはリモート（Teams）を利用して自己紹介をしていただきました。集合写真を撮影の後（写真1）、岐阜大学の清水将文氏からプレパラートを使って、顕微鏡を正しく調整する方法を学び、「病害診断事始め」とのタイトルで愛知県経済農業協同組合連合会の三宅幸律氏及び長野県野菜花き試験場の山岸菜穂氏から、病害診断の依頼を受けた際の注意点や圃場診断の重要性などをご講義いただきました。こ

ここでは芝を使ってピシウムの造卵器、造精器、卵胞子、遊走子を形成させたサンプルや青枯病罹病トマトの菌泥の観察、また、受講生自身が病害診断の依頼を受けたらどうするかといったシミュレーションもあり、貴重な体験になったのではないかと考えています。その日のプログラム終了後、長良川に移動し、鶺鴒観覧をしながら貸し切り船にて情報交換会を行い、お互いの交流を深めました。

2日目の午前中は、「植物ウイルス病診断の基礎-生物検定と遺伝子診断-」とのタイトルで大阪公立大学の望月知史氏からキュウリモザイクウイルスの罹病タバコ葉を用いて遺伝子診断と汁液接種を学びました。遺伝子診断については簡易な核酸抽出法や RT-PCR、アガロースゲル電気泳動など、また、汁液接種についてはキノアへの接種を行いました。同日午後には「植物病原糸状菌の分離保存・簡易同定」とのタイトルで三重大学の中島千晴氏から病原菌類の観察や分離のためのツールやテクニックを学びました(写真2)。病斑部から簡易に病原体の顕微鏡観察試料を調整するうえで、名前シールのラミネート部分の利用する方法の紹介があり、実践しました。また、顕微鏡下で行う単孢子分離については、慣れていない人でも容易に単孢子分離ができることを体験しました。

続く3日目は「植物病原細菌の分離保存と簡易同定」とのタイトルで静岡大学の平田久笑氏と橋本将典氏からカンキツかいよう病菌や野菜類軟腐病菌を使って、病斑の観察や菌を分離する際のコツ、また、タバコ葉への注入接種による過敏感反応やジャガイモ切片による野菜類軟腐病菌の簡易病原性検定を学びました。更に、PCRのためにコロニーから直接、簡易にDNAを抽出する方法も行いました。その後、「殺菌剤感受性検定法とマネージメント」とのタイトルで三重県農産園芸課の鈴木啓史氏と三重県農業研究所の川上拓氏から野菜類灰色かび病菌を使った殺菌剤感受性検定法を学びました。ここでは菌叢ディスクと孢子ディスクの殺菌剤含有培地による検定法やキュウリ子葉を利用した検定法を実践しました。

4日目は「土壌病害の診断と防除研究手法」とのタイトルで、午前中に川上拓氏からアブラナ科根こぶ病について、ハクサイのセルトレイ栽培で土壌の発病ポテンシャルを簡易に検定する方法などを学びました。同日午後、須賀晴久からフザリウム菌の形態観察や、病原菌を分子同定するうえでの注意を説明しました。続いて、岐阜県農業技術センターの堀之内勇人氏から疫病菌に罹病したイチゴを用いて病原菌の観察、また、岐阜大学の日恵野綾香氏から LAMP 法による疫病菌の検出方法などを学びました。

最終日となる5日目には富山県農林水産総合技術セン



写真1



写真2

ターの守川俊幸氏より、観察上のポイントの説明を受けつつ2日目や3日目に受講生自身が接種した植物体、また、培地による病原菌の分離結果を観察しました。更に同氏から「病害対策のための思考」とのタイトルで、様々な経験を踏まえた病害対策のための処方箋について講義、質疑・応答を行いました。以上で全てのプログラムが終了し、受講生全員に修了証を授与しました。

終了後、Google フォームを利用したアンケート調査を実施した結果、いずれの内容についても、ほとんどの方が技術や知識を習得できた、説明も理解できたとの回答でした。5日間に渡るプログラムで講師を担当していただきました方々、また、清水将文氏、鈴木啓史氏、日恵野綾香氏、堀之内勇人氏、守川俊幸氏には実行委員としても本プログラムの開催に尽力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。(須賀晴久)

### 3. 研究会・談話会等開催報告

#### (1) 第22回植物病原菌類談話会

第22回植物病原菌類談話会は、オンライン開催として令和5年7月22日(土)14:00~17:00にかけて開催し、翌週7月27日(木)13:00~7月31日(月)13:00まで「見逃し配信」として参加登録者を対象に同内容を視聴できるようにした。大学、公立の試験研究機関、公益財団法人、種苗会社及び農薬メーカーなど、学生・研究者144名の参加があった。

今回の談話会は、荒川征夫氏(名城大学)をコーディネーターとした「知っているさ!属までは…(続編)ー分子マーカーによる属・種・個体群の識別ー」をテーマとして講演・質疑応答、総合討論を行った。まず初めに藤 晋一氏(秋田県立大学)が「分子マーカーを活用したイネばか苗病菌の発生生態の解明とエビデンスに基づく防除指針の構築」と題して、イネばか苗病菌 *Fusarium fujukuroi* によっての全ゲノム情報を利用したマイクロサテライトマーカーの開発とそれを活用した圃場における菌の飛散距離の推定などを紹介した。続いて、荒川 征夫氏(名城大学)が「イネに病原性を示すリゾクトニア属の各菌種・亜群・変種を対象とするqPCRによる識別と検出」としてイネの紋枯病菌や疑似紋枯病などについて菌種名の変遷や培養性質を調べるうえで注意すべきポイントなどを解説した。さらに日恵野 綾香氏(岐阜大学)からは「卵菌類の属・種・個体群の識別と各種病害の発生生態」としてトマトの養液栽培に発生した病害の病原菌種と伝染源、また、サトイモ疫病菌 *Phytophthora colocasiae* についてマイクロサテライトマーカーを使った個体群構造解析を紹介した。全ての講演が終了した後、総合討論を行い、病原菌の拡散を知るうえで分子マーカーが重要な役割を果たすであろうことが議論された。次回の本談話会は新種記載する際の方法をテーマに開催を予定している。(須賀晴久)

#### (2) 第57回植物感染生理談話会

令和5年度の植物感染生理談話会を岡山大学津島キャンパス共有共創コモンズにおいて9月4日~6日の日程で開催しました。残暑厳しい折での開催でしたが、学生39名、一般49名の計88名の参加者が集まり、講師による講演とポスター発表で対面形式ならではの深い議論が行われました(写真1)。ご参加いただいた皆様にお礼申し上げます。

「植物感染生理談話会」の歴史について振り返れば、「植物病理化学談話会」(1965~77)と「植物感染機作研究談話会」(1967~77)が78年に統合され「植物感染機作・病理化学談話会」として5年間合同開催された後(1978~

82)、83年から現在の名称に変更されました(日本植物病理学百年史)。1965年(昭和40年)の第1回植物病理化学談話会から数えて今年で57回目の開催となります。本談話会はまさに20世紀後半からの我が国の植物感染生理学の発展と後進の育成に一翼を担ってきたと言えます。

今回のテーマは「植物感染生理学の未来」と銘打ち、これまで植物感染生理学研究をリードしてこられた先生方から今後本分野を牽引していく先生方まで、気鋭の15名の先生方に講師としてご登壇していただきました。各先生におかれては、ご自身の研究の現状と今後について詳しくご紹介いただきました。どれも独自の視点と洞察に富んだ素晴らしい内容で大変勉強になるものでした。本談話会を通して俯瞰的視点から植物感染生理学の「未来」やそれがつくる「食の未来」について考える機会になったのではないかと感じております。ご多忙にもかかわらず、快くご登壇と要旨の執筆をお引き受けいただいた講師の先生方ならびに会議の進行にご協力いただいた座長の皆様方に感謝申し上げます。

二日目に開催された学生・若手研究者によるポスター発表は36題ありました。各発表者による「60秒プレゼンテーション」の後、同日の夕刻にポスタービューイングとディスカッションが行われました。60秒プレゼンテーションによる事前の説明もあり会場内での議論は大いに盛り上がりました。また、審査員による学生優秀発表賞の審査が行われ、名古屋大学大学院生命農学研究科の日野雄太さん(RBOHに依存したROSバーストによるタンパク質のスルフェニル化は植物免疫応答を制御する;写真2上段左)と京都大学大学院農学研究科の本田晃大さん(ベンサムアナタバコの免疫受容体ネットワークを構成するNLRタンパク質の細胞内局在解析;写真2下段左)の両名が受賞者として選出されました。本当におめでとうございます。益々の研究の進展を期待しています。

ところで、これまでの談話会の多くは寝食を共にして議論する合宿形式(通称「夏の学校」)として開催されてきました。本会への参加をきっかけに相互の信頼・友好関係を生まれ、また若い研究者や大学院生にとっては講師へ直接疑問を投げ掛けて学問的薫陶を受ける貴重な機会となってきたことは間違いありません。今回は諸般の事情により、従来のような合宿形式での開催を見送りましたが、若い学生の皆さんの参加数が非常に多く、他大学の同世代の学生はもとより幅広い世代の参加者と楽しそうに議論する様子を随所に見かけました。会終了時には私の方から、「植物感染生理学の未来」について改めて尋ねたところ、参加者の皆さまより「明るい」というお声をいただきました。

本談話会が末永く続くことを願うばかりです。なお、次年度の第58回談話会は、名古屋大学の吉岡博文先生を代表として名古屋大学野依記念学术交流館で開催される予定です。

最後に、本談話会を開催するに当たって病理学会事務局の関係各位に深くお礼申し上げます。また、ご支援頂いた公益社団法人おかやま観光コンベンション協会にこの場を借りて感謝申し上げます。(豊田和弘)



写真1 令和5年度（第57回）植物感染生理談話会集合写真



写真2 学生優秀発表賞を受賞した日野雄太さん（上段左）と本田晃大さん（下段左）。

### (3) EBC 研究会ワークショップ 2023

毎年開催しているワークショップですが、今年度は9月11日（月）、12日（火）の2日間、東京農業大学農学部（厚木キャンパス、神奈川県厚木市）にて開催しました。一昨年度と昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響で遠隔形式での開催でしたが、今年度は4年ぶりに対面形式による開催が復活しました。無事に開催できたことは、参加いただいた皆さんと当研究会運営委員の皆さんのご協力のお陰です。この場を借りてお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

これまでのワークショップは、演者の方を数人お招きして統計解析を用いた最新の研究についてご講演をいただいております。対面形式復活の初年度のワークショップは定員を30名として、参加者それぞれがパソコンを用いて、フリー統計ソフトであるEZR（Easy R）を実際を使ってデータを解析する演習を重視した内容で開催しました。会場の収容人数に若干の余裕があり、開催直前まで参加を受け付けておりましたが、実際には参加受付開始の当日には定員の30名にほぼ達しており、関係者の皆さんの関心の高さがうかがえました。

初日は、岩館康哉氏（岩手県農業研究センター）に基礎編として「圃場での研究に役立つ基本的な6つの検定手法」と「圃場試験の結果を解析する際に役立つ検定の話」の2つを半日掛けて講師を務めていただきました。二日目は、池田健太郎氏（法政大学生命科学部）に応用編として「一般化線形モデルおよび一般化線形混合モデルによる複数回の圃場試験データの解析」をやはり半日掛けて講師を務めていただきました。2日間ともに参加者の皆さんはパソコンにデータやコマンドを入力して、解析を試しており、最



写真 解析ソフトを実際に使うなど演習も取り入れたEBC研究会ワークショップ2023。

後に田代暢哉氏（EBC 研究会前代表）を交えた総合討論はもちろん、講演の合間の休憩中と同様に終了後も参加者の皆さんのお二人の講師への質問が続いていました。

終了後の参加者の皆さんにお願いした Forms による任意のアンケートでも、ほぼ★★★★★（4.89）の高い評価をいただきました。感想も「大変に理解が深まった。」「モチベーションが上がりました。」「職場で活かせるレベルまで統計解析が身についた。」などなど、好意的な感想が届いたのは講師のお二人に時間を掛けていただいたお陰です。

EBC 研究会では、次のワークショップ開催に向けて、いただいた感想を大いに参考にして、さらに良いワークショップを目指して参ります。次回を楽しみにしていただき、ぜひご参加いただきたいです。どうぞよろしくお願ひします。  
（篠原弘亮）

#### 4. 技術士対応委員会

令和4年度技術士第二次試験（農業部門・植物保護）で8名が合格

令和4年度の技術士第二次試験は、令和5年3月10日に合格者が発表されました。農業部門・植物保護では以下の8名の方が合格されています。（敬称略・官報掲載順）

萩原 淳史（北海道立農業大学校）、小河原 孝司（茨城県農業総合センター；本会会員）、富山 愛佳（現在所属なし；元本会会員）、櫛間 義幸（宮崎県在住；本会会員）、太田 泉（農研機構野菜花き研究部門）、松橋 伊織（岩手県農業研究センター）、達 瑞枝（農研機構東北農業研究センター；本会会員）、関原 順子（富山県農林水産部農産食品課；本会会員）。

今回の合格者を合わせ、技術士第二次試験（農業部門・植物保護）の累計合格者は計161名となりました。引き続き、試験研究機関や民間企業、大学など、多様な組織から多くの方の受験をお願いします。令和5年度の技術士第一次試験は令和5年11月26日（日）に行われる予定です。技術士第二次試験の筆記試験は令和5年7月17日（月・祝）に行われ、口述試験は、筆記試験合格者に対して令和5年12月上旬～令和6年1月中旬にかけて行われる予定です。詳細は日本技術士会のホームページの試験・登録情報から、試験の実施案内を御確認ください。今後も多くの技術士（農業部門・植物保護）の誕生を期待しています。

（濱本 宏）

#### 【関連国際会議開催状況】

##### ICPP2023 から

フランスで第2の都市で、ローマ帝国の時代から2000年以上の歴史をもつ、世界遺産の街リヨンにて、国際植物

病理学会（International Congress of Plant Pathology, ICPP2023 ONE HEALTH for all plants, crops and trees）が、2023年8月20～25日にかけて開催されました。100ヶ国以上から2000名以上の植物病理研究者が参加しました。1973年の米国ミネアポリスにての第1回の開催から、50年の節目となる開催でした。植物病理学分野における研究、教育、社会へのコミットメント、とくに世界の農業と地球環境の持続性に重きを置いた意義深い学会に位置付けられました。連日、最高気温が40度を超える猛烈な暑さの中での学会でしたが、会場内は快適な状態であり、食の都リヨンならではの美味しいランチが提供されました。また、コーヒープレークでのエスプレッソとクッキーは頭の疲れをいやしてくれました。8月21日8:30からPlenary Openingが行われ、連日、夕刻まで濃度の濃い発表が続きました。病原菌と宿主植物のゲノム解析がすすみ、それぞれのオミクス解析の結果を基にして、感染生理、生態、系統進化、診断、防除、疫学、検疫などについて、基礎科学を現場での応用科学に取り組んだ研究成果が数多く発表されておりました。さらに、“One-to-one conversations with an expert area”のセッションが設けられ、専門家と質問者が1対1で15分にわたり、質問者の質問について話し合いを行う場が設けられました。ISPP（International Society for Plant Pathology）会長のJan Leach博士も専門家として登場しました。基礎研究の成果を農業現場へ普及することがトレンドになりつつあると感じました。日本からの参加者はおおよそ30名で、ポスター発表25題でした。それらの中からCONCURRENT SESSIONSでの口頭発表に高知大学 大西浩平博士が選ばれました。一方、中国と韓国それぞれから114題と72題のポスター発表がありました。中国からは、CONCURRENT SESSIONSでの口頭発表に20題が選ばれました。ICPPは、植物病理学に関する世界の研究の中核をなす学会であります。多くの大学で大学院入試の日程と重なったとは言え、我が国からの参加者・発表者の少なさから、植物病理研究に関して、世界でのアジアの国々の位置づけの変化を感じずにはいられませんでした。次回は、2028年8月19～25日に、Andrew Geering博士をChairとしてオーストラリアのゴールドコースト Gold Coast Convention & Exhibition Centerで開催されます。ゴールドコーストにて、1988年に京都で開催された第4回ICPPでのように、我が国から多数の発表があり、植物病理学研究大国Japanの再来を世界の植物病理学者が感じるようになることを老婆心ながら期待しております。

うれしいお知らせがあります。日本植物病理学会会長を歴任されました岡山大学名誉教授 白石友紀博士と摂南大学教授 久保康之博士が、ICPP2023におきまして、ISPPフェ

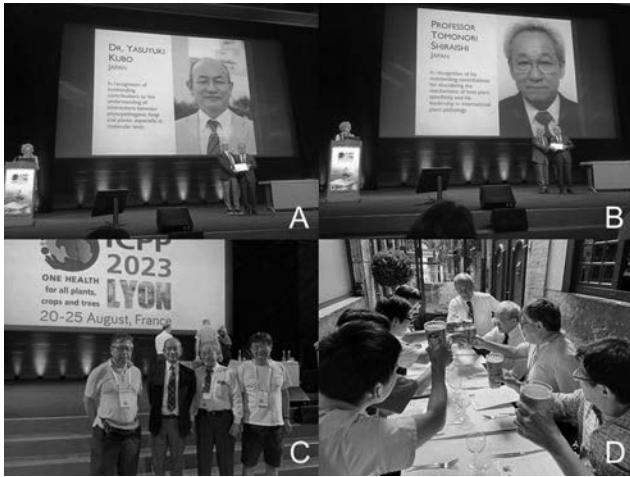


写真 A, 久保康之博士受賞式; B, 白石友紀博士受賞式; C, 受賞式を終えて (岡山大学 一瀬先生, 久保先生, 白石先生, 曳地); D, お祝いの会 (神戸大学 足助先生から)

ローをご受賞されました。前回の ICPP2018 (米国ポストンで開催) での露無慎二先生に次ぎ、我が国からの 2, 3 番目の ISPP フェローの受賞です。学会最終日の 8 月 25 日に受賞式が行われました。日本植物病理学会と懇意な Jan Leach 博士から受賞の紹介を受け、Yong-Hwan Lee 博士から賞状を授与されました。日本植物病理学会として大きな誇りで、かつ若手研究者の研究意欲を増進するご受賞であります。喜びをともにしたく思い、学会終了後、日本からの参加者有志で、白石先生と久保先生を囲みお祝いの会を開催し、リヨンの食を楽しみました。また、ISPP の会長は、米国コロラド州立大学の Jan Leach 博士から、韓国ソウル国立大学 Yong-Hwan Lee 博士に引き継がれることが決定しました。(曳地康史)

#### 【学会活動予定】

##### 1. 2023 年度部会開催状況ならびに予定

###### (1) 九州部会

日時：令和 5 年 11 月 29～30 日

場所：長崎県農協会館

事務局：佐賀大学

#### 【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

入枝泰樹氏 (信州大学学術研究院 (農学系)) が、2023 年度 (第 4 回) 日本微生物学連盟「野本賞」を受賞されました。「野本賞」は、日本微生物学連盟が微生物学分野において、学術的に優れた一連の研究に基づく論文、著書等を発表し、今後一層の活躍が期待できる本連盟加盟学術団体正会員 (45 歳以下) に対し、授与する賞です。受賞の

対象となった研究業績は、「病原糸状菌と植物の攻防戦における感染・防御戦略の分子機構に関する研究」です。日本植物病理学会の受賞は今回が初となります。

また、宮下脩平氏 (東北大学大学院農学研究科) が 2023 年度 (第 22 回) 日本農学進歩賞を受賞されました。本賞は、人類と多様な生態系が永続的に共生するための基盤である農林水産業およびその関連産業の発展に資するために、農学の進歩に顕著な貢献をした者を顕彰するものです。受賞の対象となった研究業績は、「実験と数理モデリングを組み合わせた植物ウイルス研究」です。(大里修一)

#### 【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしくお願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

門田育生、染谷信孝、大里修一、石橋和大

#### 編集後記

学会ニュース第 104 号をお届けします。本号では秋に行われた部会や研究会の報告を中心に掲載しました。

新型コロナウイルス感染症の 5 類感染症移行から、各部会および研究会の対面開催が再開され、活発な議論や情報交換が行われました。会の開催や運営にご尽力頂いた皆様に、感謝申し上げます。

次に、国際植物病理学会 (ICPP 2023) が 8 月 20 日から 8 月 25 日までフランスのリヨンで開催されました。この場で、名誉会員の白石友紀先生と久保康之先生が ISPP フェローを受賞されました。誠にありがとうございます。今後、益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。また、入枝泰樹氏が 2023 年度 (第 4 回) 日本微生物学連盟「野本賞」を受賞されました。更に、宮下脩平氏が 2023 年度 (第 22 回) 日本農学進歩賞を受賞されました。これらは、植物病理学が農業や農学の発展にも大きく貢献していることを示すものと思います。受賞おめでとうございます。

(門田育生)

## 日本植物病理学会賛助会員 (ABC 順)

アグロカネショウ株式会社 307-0001 結城市結城 9511-4	0296-21-0175
アリスタライフサイエンス株式会社 103-0027 中央区日本橋 1-4-1 日本橋一丁目三井ビルディング 19 階	03-5203-9350
バイエルクロップサイエンス株式会社 100-8262 千代田区丸の内 1 丁目 6-5	03-6266-7413
BASF ジャパン株式会社 103-0022 中央区日本橋室町 3 丁目 4 番 4 号 OVOL 日本橋ビル 3 階	03-5291-3821
コルテバ・ジャパン株式会社 100-6111 千代田区永田町 2-11-1 山王パークタワー	03-3519-3243
エフエムシー・ケミカルズ株式会社 100-0004 千代田区大手町 1-1-1 大手町パークビル 8 階	03-5208-1010
ホクサン株式会社 061-1111 北広島市北の里 27-4	011-370-2103
北興化学工業株式会社 103-8341 中央区日本橋本町 1-5-4 住友不動産日本橋ビル	03-3279-5831
井上石灰工業株式会社 781-0112 高知市仁井田 1641	088-847-0615
石原産業株式会社 525-0025 草津市西渋川 2-3-1	077-562-3574
カゴメ株式会社 329-2762 那須塩原市西富山 17 番地	0287-36-2935
科研製薬株式会社 113-8650 文京区本駒込 2-28-8 文京グリーンコートセンターオフィス	03-5977-5032
クミアイ化学工業株式会社 110-8782 台東区池之端 1-4-26	03-3822-5165
株式会社クレハ 生産・技術本部いわき事業所 974-8686 いわき市錦町落合 16	0246-63-5111
株式会社久留米原種育成会 830-0064 久留米市荒木町藤田 1422-1	0942-26-2943
協友アグリ株式会社 103-0016 中央区日本橋小網町 6-1 山万ビル 11F	03-5645-0700
丸和バイオケミカル株式会社 101-0041 千代田区神田須田町 2-5-2 須田町佐志田ビル	03-5296-2313



三井化学クロップ&ライフソリューション株式会社		
103-0027	中央区日本橋 1-19-1 日本橋ビルディング	03-5290-2700
株式会社日本医化器械製作所		
543-0014	大阪市天王寺区玉造元町 3 番 9 号	06-6765-0223
日本化薬株式会社		
314-0255	神栖市砂山 6	0479-40-2771
日本農薬株式会社		
104-0031	中央区京橋 1-19-8 京橋 OM ビル	03-3274-3415
一般社団法人日本植物防疫協会		
114-0015	北区中里 2-28-10	03-5980-2181
日本曹達株式会社		
100-8165	千代田区大手町 2-2-1	03-3245-6210
株式会社ニッポンジーン		
930-0834	富山市問屋町 2-8-16	076-451-6548
日産化学株式会社		
103-6119	中央区日本橋 2-5-1 日本橋高島屋三井ビルディング 18・19 階	03-4463-8330
農薬工業会		
103-0025	中央区日本橋茅場町 2-3-6 宗和ビル 4 階	03-5649-7191
OAT アグリオ株式会社		
101-0052	千代田区神田小川町 1-3-1 NBF 小川町ビルディング 8 階	03-5283-0251
大内新興化学工業株式会社		
103-0024	中央区日本橋小舟町 7-4	03-3662-6451
株式会社理研グリーン		
110-8520	台東区東上野 4-8-1 TIXTOWER UENO 8F	03-6802-8587
サンケイ化学株式会社		
891-0122	鹿児島市南栄 2-9	099-268-7588
株式会社エス・ディー・エスバイオテック		
101-0022	千代田区神田練堀町 3 ASK ビル 5 階	03-6867-8311
シンジェンタジャパン株式会社		
104-6021	中央区晴海 1-8-10 オフィスタワー X 21F	03-6221-3819
住化農業資材株式会社		
541-0043	大阪市中央区高麗橋 4-6-17	06-6204-1139
住友化学株式会社		
103-6020	中央区日本橋 2-7-1 東京日本橋タワー	03-5201-0281
株式会社トーホク		
321-3232	宇都宮市氷室町西原 1625	028-667-1321

ヴィルモランみかど株式会社	298-0202 夷隅郡大多喜町下大多喜 2789-1	0470-82-2413
横浜バイオテクノロジー株式会社	240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-7 横浜国立大学総合研究棟 S703-1	045-339-4160
米澤化学株式会社	601-8455 京都市南区唐橋芦辺町 14	075-681-9526
全国農業協同組合連合会	100-6832 千代田区大手町 1-3-1 JA ビル 33 階	03-6271-8289
全国農業協同組合	101-0047 千代田区内神田 3-3-4	03-3254-4171